

第1分科会

高校の探究活動を深めるために効果的な高大連携の“形”とは？ ～高大連携の今と未来～

[報 告 者] 松嶋 亮潤（京都府立福知山高等学校 みらい探究部 教諭）
[報 告 者] 日下部成登（京都府立北桑田高等学校 系属校準備部 教諭）
[コーディネーター] 白石 耕二（京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事）

本分科会では、2校による実践報告を通じて高大連携の可能性を考える。
福知山高校は、文理科学科の探究活動「みらい学」において、大学等での研究を見据えた活動の中で、研究を“学問的に深める”ために効果的な高大連携の形を模索している。その成果と課題を報告する。

北桑田高校は『森の京都』を教材化した探究学習に再構築する過程における高大連携の取組を通して、来年度系属高校としてスタートする北桑田高校が考える高大連携のあり方について報告する。

概 略

- 1 趣旨説明
- 2 報告
 - (1) 報告① 京都府立福知山高等学校（松嶋氏）
テーマ：「探究を研究へ ～『みらい学』における高大連携の実践と課題～」
 - ・文理科学科の総合的な探究の時間「みらい学」と指導体制
 - ・高大連携の成果と課題
 - ・高大連携を効果的なものにするためのポイント
 - (2) 報告② 京都府立北桑田高等学校（日下部氏）
テーマ：「高大連携 新しい形への取組」
 - ・探究的な学びにおけるモヤモヤの要因
 - ・高度な探究活動のための高大連携事例
 - ・高度な探究活動のための新しい高大連携の形（系属高校としての取組）
- 3 報告に対する質疑応答
- 4 休憩
- 5 グループディスカッション
理想的な高大連携の形とその阻害要因（モヤモヤ）についてグループディスカッション
- 6 意見の全体共有
各グループで出された意見を発表し、全体で共有した。

全体討論の内容

報告のあった2校における探究活動と高大連携の取組を参考に、参加者は自校での探究活動を振り返り、高大連携を通じた探究活動の深め方や、連携を進める際の体制の在り方について協議・共有した。

<報告者への主な質問>

質問①:

高大連携を進めるにあたり、大学側とどのように接点を持っているのか。また、教員個人の人脈を活用しているという話があったが、その人脈はどのように築いてきたのか。

質問②:

大学教員は、具体的にどのような形で高校の「総合的な探究の時間」に関わっているのか。

質問③:

大学教員等による講演について、少人数に分け、複数回実施することで理解が深まったという報告があったが、それに対して講師側からはどのような反応があったのか。具体的な声や様子を教えてほしい。

到達点と今後の課題

京都府立福知山高等学校および京都府立北桑田高等学校による、総合的な探究の時間を中心とした高大連携の取組には、いずれも「探究活動を高度化させる」という共通の目的がある。しかし、その高度化のあり方には大きな違いが見られる。

府立福知山高等学校では、大学教員による特別講義や発表会での助言にとどまらず、普段の総合的な探究の授業時間に大学教員が直接高校を訪れて指導したり、生徒と大学教員がオンラインで継続的にやり取りしたりする体制を整えている。これにより、生徒は専門的で細やかな指導を受けることが可能となり、学問への興味が深化し、探究の質的向上が実現している。

一方、府立北桑田高等学校では、少人数の生徒を対象に、大学教員が身近なテーマで特別講義を行うことで、生徒の興味・関心を喚起している。また、高校教員が大学教員から授業計画や実践について助言を受けることで授業改善にも取り組み、高大連携の効果を生徒だけでなく教員にまで広げること成功している。

両校に共通しているのは、連携の目的や生徒の興味・既習内容などについて丁寧に情報共有を行い、定期的に振り返りの場を設けるなど、高校と大学の教員が密にコミュニケーションを図っている点である。今回の分科会でも、効果的な高大連携を進める上で、このコミュニケーションこそが鍵であることが改めて確認された。

しかし、こうした成果がある一方で、依然として課題(モヤモヤ)は残されている。具体的には、コーディネーター不在によって生徒と大学教員のマッチングが難しいことや、探究活動の深化が生徒の希望進路の実現とどのように関連しているのかが不透明であることが挙げられる。今後は、高校と大学が協力関係をさらに強固にしつつ、探究活動をより深めるために、有効な高大連携の形を引き続き模索していく必要がある。



スライド 1

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

2025年度 第23回高大連携教育フォーラム

探究を研究へ！！

～『みらい学』における高大連携の実践と課題～

京都府立福知山高等学校
みらい探究部長／文理科学科長
教諭 松嶋 亮潤

スライド 2

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

○みらい学
(文理科学科の総合的な探究の時間)

- ✓ 将来の研究活動を意識
- ✓ 教師、大学、企業がバックアップ
- ✓ 全教科の学びを活用



スライド 3

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

みらい学 I (1時間/週)

1学期	2学期	3学期
探究基礎	研究①	最終発表

みらい学 II (2時間/週)

1学期	2学期	3学期
研究2 研究計画発表	中間発表	最終発表

スライド 4

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

「みらい学」理系分野

MIRAI SCIENCE



スライド 5

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

「みらい学」文系分野

MIRAI ARTS



スライド 6

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

【みらい学 I テーマ(一部) ※昨年度】

《MIRAI SCIENCE I (理系)》

- ・ 福高 夜の住人:トレイルカメラの目撃証言(生物)
- ・ 炭酸飲料を用いた気体の分子量の測定(化学)

《MIRAI ARTS I (文系)》

- ・ ”まさにあまさ”の調査です(家庭)
- ・ デザイン ピクトグラムが学校にもたらす変化(美術)

スライド 7

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

【現在研究中のみらい学Ⅱ テーマ(一部)】
 《MIRAI SCIENCEⅡ(理系)》

- ・液体なのに意地っ張り?ダイラタンシー流体と速度のヘンな関係(物理)
- ・生ごみから作る未来のエネルギー(化学)
- ・今日、空きになりました。自習室編
 ～Pythonを用いて席の利用状況を把握する～(情報)
- ・福高掲示板を作るって伝えなきゃ!!(情報)

スライド 8

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

《MIRAI ARTSⅡ(文系)》

- ・#アフター光秀～江戸時代の福知山藩主・朽木氏の災害対策～(歴史学)
- ・Listen for Grammar～洋楽に潜む中学英文法に耳を傾ける～(言語学)
- ・新世代 施策からのチャート式少子化対策(地域学)
- ・めざせ!ポケモンおんがくマスター
 ～みんなも知識ゲットじゃぞ～(音楽)

スライド 9

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

【みらい学の指導体制】
 《担当教員》・みらい学Ⅰ 10名 ・みらい学Ⅱ 12名
 《研究アドバイザー・研究協力》

- ・京都大学 ・同志社大学 ・福知山公立大学
- ・京都府立大学

《技術支援・連携等》

- ・三和分校 ・福知山市役所 ・京都府中丹技術支援室

スライド 10

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

包括的な高大連携に関する協定



スライド 11

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

研究室等との連携



スライド 12

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

様々なアウトプットの機会



研究計画発表会 中間発表会

スライド 13

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School



探究発表祭 (F3!)

13

スライド 14

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

高大連携の成果

	学問への興味の深化	大学レベルの研究・実験設備
	探究の質的向上	大学教員・大学院生との交流
	実践的スキルの習得	研究方法・発表方法・思考力

14

スライド 15

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

高大連携の課題

	コーディネーターの不在	マッチングと情報共有
	大学と高校の違い	技術、知識、設備、時間、体制、意識
	進路との接続	探究の深化 ≠ 進路実現 ?
	負担感	時間・費用・調整

15

スライド 16

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

高大連携のポイント

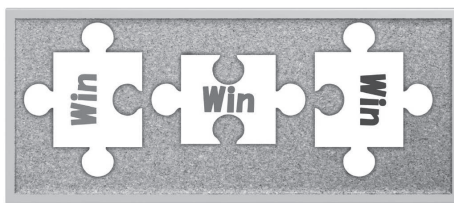
	目的の明確化と共有	マッチングと情報共有
	丁寧なマッチング	生徒の興味やレベルの把握
	定期的な振り返り	生徒と教員
	コミュニケーション	大学と高校、教員間

16

スライド 17

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School

良好なWin-Win 関係を!!



17

スライド 18

京都府立福知山高等学校・附属中学校 Kyoto prefectural FUKUCHIYAMA High School & Junior High School



18

スライド 1



スライド 2

探究的な学びに関する本校の『モヤモヤ』要因
 ☆『ツテなし 金なし 時間なし 教科書なし』の四重苦
 R7教育課程研究協議会『総合的な探究の時間』部会で各校から挙げられた課題も、概ね、この四重苦に集約できる。

☆ **迷走して方向性を見失った全体計画**
 「予算のかからない、日程に融通の効く連携を、週1単位の教育計画に落とし込み、10ヶ月で各々課題を見つけ、成果をまとめる」指導計画、それは、系統性という側面で大きな課題を残した。

☆ **『高度な探究活動のように見せたい』ための高大連携**
 「探究活動を高度化させる」という本質より、「探究活動が高度化したように見える」ことを期待した連携になっていたのではないか。

↓

本校の場合「探究的な学びの指導法を探究する教員の姿勢」に“モヤモヤ”の根本要因があった！

スライド 3

〈北桑田小・中・高連絡協議会からRestart〉
 「私たちが教えていた頃とは受け取り方が違うと思いますが、教材やゲストティーチャーの多くが小・中学校と多く重なっています。」

↓

『義務教育発展型』の探究学習から
 『自ら学びを高度化させていく大学型』の探究学習に全体計画の再構築を開始した！



スライド 4

高度な探究活動のための高大連携事例Ⅰ
 ☆京都大学大学院地球環境学堂浅利研究室
 [2020年～2022年]
 [現：総合地球環境学研究所 浅利美鈴教授]

↓

全体計画を外部評価
 「生徒自らが学びを高度化させていく探究学習」となっているか？

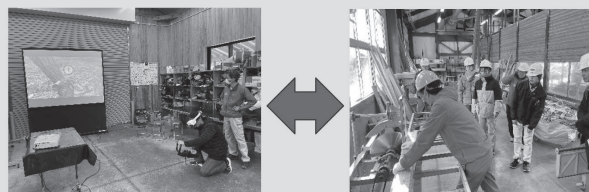


スライド 5

高度な探究活動のための高大連携事例Ⅱ
 ☆京都府立林業大学校 [2021年～現在]

↓

施設の相互利用による学習機会の充実



スライド 6

☆『系属高校』という新しい高大連携の形！



高等学校
学習指導要領に基づいた教育活動



大学
自治に基づいた研究活動

探究にかかる時間、探究分野における専門性、興味・関心の度合いの違いが「モヤモヤ」に！

スライド 7

高度な探究活動に向けた新しい連携の形Ⅰ
☆大学教授陣の深い知見に基づいた助言と広いネットワークは高校教員に“活きる”
“活かせる”



教授陣から助言を受けた高校教員が、授業改善の過程で授業力を向上させるという好影響も！

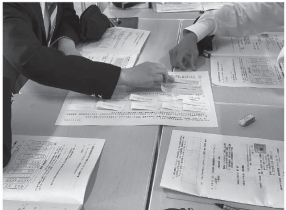
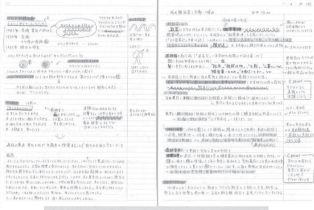
スライド 8

高度な探究活動に向けた新しい連携の形Ⅱ
☆特別講義は、教授陣が生徒の習熟状況や講義のねらい、到達目標を十分に共通理解した上で行う。
例) 少人数で複数回 身近なテーマ 高校の学びとの関連づけ



スライド 9

学問的な刺激を受けて、思考を高度化させていく姿

Kishimizu high school has special classes about the forest. In that class, I learned about the forest about the forest. Later, I actually went to the forest, climbed a tree and cut branches. I learned three things from these experiences.

Firstly, I know that the forest is stable because it is being managed by people. I learned it for the first time and I was really surprised because I thought that trees grow themselves to nature. However, when my teacher said that good trees are grown by taking care of the trees, I recognized that my thought was a mistake. From these things, I learned about how people and forests have a symbiotic relationship. We have to take care of the trees before we cut them.

Secondly, I learned about using wood. I thought that there are no people who want to use wood to make things before I learned in the lecture. My thoughts were half correct and half wrong. Even in modern times, there are people who want to use wood as well as plastic that make use of forest. However, a lot of people use my Japanese wood that imported wood because imported wood is cheaper than Japanese wood. So, trees planted for industry are not widely used in Japan. As a result, there are no new growing trees. This means more trees to be used. We must stop this vicious circle.

Thirdly, I learned that the work managing trees was more difficult than I had thought. I had cutting a branch, which ended up being too hard for me to do successfully. Also, I learned that work takes time because it is manual work. I learned my teacher said that people who work to manage trees are demanding to Japan. He also said that the nature forest management in Japan really runs difficult. We must solve this problem as soon as possible.

スライド 10

高度な探究活動に向けた新しい連携の形Ⅲ
☆『系属校関係を成熟』させる上での課題

京都府立大学系属学部・学科と北桑田高等学校の互恵関係をいかに構築できるか？

【例】

- 教授陣に対し、連携活動における高校生の学習成果を丁寧にフィードバックする。
- 高大連携により学問的な刺激を受けた生徒が、系属学科先への進学意欲を高める。
- 教授陣や院生・学生の研究活動に対する協力を行う。
- 他府県出身の学生の教育実習受け入れる。
- 高校の施設を使用した学生の体験支援を行う。 等々

第2分科会

探究的な学びの可能性を広げる連携と協働の「モヤモヤ」

ー中・高・大、それぞれの立場から見える外部連携の課題とヒントを探るー

[報 告 者] 長谷川夕起（京都橘中学校・高等学校 探究学習コーディネーター主任）

[報 告 者] 沼田 和也（同志社中学校・高等学校 中学教頭）

[コーディネーター] 滋野 正道（龍谷大学 心理学部 講師）

中・高・大の三者が、それぞれの立場から探究的な学びを進める中で直面する、外部との連携や協働をコーディネートする際の「モヤモヤ」を共有する。授業運営の工夫や課題、外部連携における役割や持続性、越境的な協働のあり方について視点を提示し、フロアとも議論を深める。最終的には、それぞれの現場で活かせる具体的なヒントや方策を持ち帰れるようなセッションを目指す。

概 略

本分科会では、中学校・高等学校・大学という異なる教育段階の立場から、探究的な学びを推進する中で生じる外部連携・協働に関する「モヤモヤ」を共有し、その背景や構造を捉え直すことを目的として実施された。

冒頭では、参加者同士によるチェックインを通じて、それぞれが抱える課題や期待を可視化した。その後、京都橘中学校・高等学校の長谷川夕起氏より、探究を学校の軸に据えた実践事例が紹介された。インタビュー学習、チェンジメーカープロジェクト、PBL型研修旅行など、多様な外部連携の取り組みが進む一方で、伝達不足や期待値のズレ、ボランティアになりがちな関係性といった「対校外」の課題、また大規模校における浸透の難しさや教科との接続、体制づくりといった「対校内」の課題が率直に語られた。

続いて、同志社中学校・高等学校の沼田和也氏からは、「世代と立場を越えて学びを編みなおす」という視点のもと、授業と正課外活動を往還する「学びプロジェクト」の実践が紹介された。「すぐき漬けプロジェクト」をはじめとする事例では、社会課題や地域課題を起点に、教員・生徒・地域・国内外の多様な人々が関わり合いながら学びが展開されていくプロセスが示された。そこでは、成果や評価を目的化せず、小さく始め、偶然の出会いや対話を大切にしながら学びを育てていく姿勢が強調された。

全体討論の内容

全体討論では、話題提供を受けてグループごとのディスカッションが行われ、現場に即した具体的な質問や意見が多数出された。

特に多く挙がったのは、外部連携を担う「あいだ的な存在」の必要性である。社会との接点をつくる役割を誰が担うのか、教員や職員が通常の役割をどこまで越えて関わるのか、その際に生じる負担や葛藤について議論が交わされた。また、公立校における異動の問題や、引き継ぎ資料の重要性

など、持続可能性に関する問いも多く共有された。

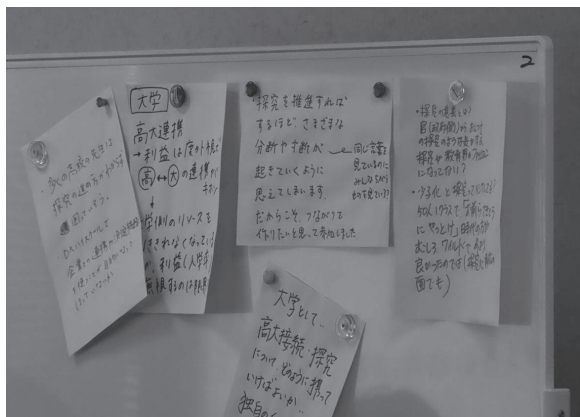
さらに、「子どものため」という目的が強調されすぎることで、教員自身が犠牲を強いられてしまう構造への違和感も示された。探究や外部連携を続けるためには、教員自身が楽しさや手応えを感じられること、個人の熱量をどのように組織へと接続していくかが重要であるという認識が共有された。

討論を通して、探究的な学びは授業か正課外かという二項対立で捉えるものではなく、両者を往還しながら編み直していく営みであることが再確認された。

到達点と今後の課題

本分科会の到達点として、外部連携や探究的な学びにおいて生じる「モヤモヤ」を、個人の悩みや失敗として抱え込むのではなく、共有し、言語化することで次の実践につなげる視点が確認されたことが挙げられる。特に「終わってしまうこと」や「続かないこと」を否定せず、その時々条件や関係性に応じて学びの形を更新していく姿勢の重要性が共有された。一方で今後の課題としては、外部連携を教員個人の努力に依存させないための組織的な位置づけ、引き継ぎや制度設計の工夫、そして金銭的・時間的な持続可能性をどう確保するかが挙げられる。また、探究的な学びを特別な活動として切り離すのではなく、授業の持つ力を再評価しながら、より多くの生徒が関われる形で埋め込んでいくことも重要な論点である。

本分科会での議論を踏まえ、今後も中・高・大それぞれの立場を越えた対話と協働を通して、探究的な学びの可能性を広げていくことが期待される。



スライド 1

第2分科会

探究的な学びの可能性を広げる連携と協働の「モヤモヤ」
— 中・高・大、それぞれの立場から見える外部連携の課題とヒントを探る —

○報告者
長谷川夕起氏（京都橘中学校・高等学校 探究学習コーディネーター主任）
沼田 和也氏（同志社中学校・高等学校 中学教頭）

○コーディネーター
滋野 正道氏（龍谷大学 心理学部 講師）

スライド 2

本分科会のねらい

- 中・高・大の三者が、それぞれの立場から探究的な学びを進める中で直面する、外部との連携や協働をコーディネートする際の「モヤモヤ」を共有する。
- 授業運営の工夫や課題、外部連携における役割や持続性、越境的な協働のあり方について視点を提示し、フロアとも議論を深める。
- 最終的には、それぞれの現場で活かせる具体的なヒントや方策を持ち帰れるようなセッションを目指す。

スライド 3

事前打ち合わせで語られた様々な「モヤモヤ」

1. 現場から見える“スタート地点の違い”について(授業 / 課外)
2. 探究で起きる「生徒の動き」のリアリティ
3. 外部連携における調整・連続性の課題(意図を共有できるか)
4. 金銭的仕組みと持続性の話
5. 学年全体で「しっかりやらせる」ことを目指すと破綻する？

ヒト 、モノ 、カネ 

⚠️ 盛大な愚痴大会にならないようにしたいですね

スライド 4

滋野 正道 Shigeno Masamichi

龍谷大学心理学部特任講師（実務家）

- キャリアデザイン論 / コミュニティ（と心理学）

一般社団法人ココカラスタジオ理事

- 社会教育からまちづくり / 高校の探究サポート / マイプロジェクト

【関心ごと】

コミュニティデザイン（農村の地域自治 / 災害復興 / 若者の地域参画・協働 / 探究 / PBL）

キャリアデザイン（生き方、あり方 / 社会連携 / 企業連携）

【キャリア】

佛教大学社会学部 → 龍谷大学大学院政策学研究所 → 休学 → 代表取締役 → 集落支援員

→ 大学コーディネーター（文） → 非常勤講師（文 / 政策 / 経済） → 大学特任教員（実務家）

スライド 5

話題提供①

○報告者
長谷川 夕起 氏
京都橘中学校・高等学校 探究学習コーディネーター主任

（事前打合せでの小話）

- 生徒あるある「足し算はやって、引き算はしない」
- 学年全体でしっかりするをしようとするとできない。
- せっかくある授業を如何に有意義な時間とするか。
- モヤモヤ語り出すと語りきれません！

スライド 6

話題提供②

○報告者
沼田 和也 氏
同志社中学校・高等学校 中学教頭

（事前打合せでの小話）

- 学校の授業に収めないといけないからモヤモヤ？
- 私の話は学校の授業を否定していくところから始まっていくんですが…
- ソーシャルイノベーション起こすために有志を募る
- 熱量と時間量の調整が難しい。授業のシステムはすごい！

スライド 1

京都橘中学校・高等学校
探究学習コーディネーター主任
長谷川 夕起

探究的な学びの可能性を広げる連携と協働の「モヤモヤ」
ー 中・高・大、それぞれの立場から見える外部連携の課題とヒントを探る ー

スライド 2

自己紹介（経歴）

兵庫県立兵庫高校卒業
姫路工業大学 工学部 応用科学科 卒業
兵庫県立大学大学院 工学研究科 物質系工学専攻 前期課程 修了
株式会社コベルコ科研 入社（7年間勤めたのち退社）

2016年～
個人事業「wayu.うえい」立ち上げ（人材育成、コーチング）
与謝野町地域おこし協力隊 高校魅力化コーディネーター
京都橘中学校・高等学校 探究学習コーディネーター

スライド 3

学校紹介

	京都橘高校	京都橘中学校
設立・開校	1902年 (京都女子工芸学校)	2010年
生徒数	1069名 (10クラス×3学年)	285名 (3クラス×3学年)
教育理念	自立 共生 ～変化を楽しむ人であれ～	
特徴的な学び	自分に必要な学びを掴める教育環境 ☑ 手厚い授業外サポート ☑ 文化系も体育会系も全国レベルの強豪クラブが勢ぞろい！部活動 ☑ 京都橘の教育に対する外部協力者多数！ など	

スライド 4

自己紹介（学校での立場）

学校としての探究の在り方の設計

教材提供
授業打ち合わせ

来校依頼
見学依頼
内容打ち合わせ

スライド 5

自己紹介（学校での立場）

「探究」を学校の軸の1つにしたい！

教材提供
授業打ち合わせ

来校依頼
見学依頼
内容打ち合わせ

校内×校内、校内×校外様々な形のつなぎ役

スライド 6

本校の探究の流れ（6年間の設計）

自ら動き、自分の力で【社会とつながる】

失敗を歓迎しながら【得た情報を活用する】

【社会を知る、足で稼ぐ、プロに出会う】

【ホンモノを知る】

【自らの人生の舵を自分で握る】

【自ら動き進路を切り開く】

スライド 7

第236回高大連携教育フォーラム 【第2期】第2分科会

今年度
1学期の外部協力者数

50名以上

(※延べ数、中高の取り組みの合計)

スライド 8

第236回高大連携教育フォーラム 【第2期】第2分科会

具体的な取り組み
【中学校】

コミュニケーション力向上講座
3年かけてコミュニケーション力の向上を図る講座（今年度初の取組）

生徒数	285名
協力企業数	3社(1学年1社)

※ 今年度 実績

インタビューをしよう(中2)

自分の価値観を探るヒントを得るために、様々な大人にインタビューをする。

生徒数	100名
協力者数	10名

※ 今年度 実績

スライド 9

第236回高大連携教育フォーラム 【第2期】第2分科会

具体的な取り組み
【中学校】

チェンジメーカープロジェクト(中3)

「チェンジメーカーになる」をコンセプトに、京都市内の企業から課題やプロジェクトテーマをいただいてその解決策を提案する

【協力体制（今年度）】

生徒数	83名
協力事業者様数	11社
関わっていただく頻度	5回 (来校4回、訪問1回)

＜ミッション（一部紹介）＞
 ✓ まだ障害を持つ方（就労支援事業所）と仕事をしたことがない方（企業、地域の人々）へのアピール方法と内容を考えよう！（就労支援センター）
 ✓ 布おしぼりの新しい名称を考えよう！（おしぼりレンタル事業）
 ✓ 未発表作品『×××』を世界中の人に知ってもらえるようなプロモーションアイデアを考えよう！（ゲーム企画）

スライド 10

第236回高大連携教育フォーラム 【第2期】第2分科会

具体的な取り組み
【高校】

PBL型研修旅行(高1)

探究×研修旅行として、外部企業に委託。
訪問地域の事業者様に対して、事業課題の解決策を提案する。
約1年間、企業ならびに大学生メンターが伴走

市場調査

生徒数	335名
協力事業者数	13
大学生メンター	13名以上

※ 昨年度の実績

販売会

企業調べ

担当企業訪問（見学）

打ち合わせ

提案会

スライド 11

第236回高大連携教育フォーラム 【第2期】第2分科会

具体的な取り組み
【高校】

※ 今年度 実績

マイプロ型探究活動(高校2年生)

中間報告会において、外部から講評者から活動促進のための講評をいただく。
(その他、自分たちの活動において、外部協力者に自らアプローチ)

マイプロ型探究活動(高校3年生)

本気の大人による「これまでの人生」の講演会を実施

生徒数	368名
講評者数	28名(2日間・延べ数)

※ 今年度 実績

スライド 12

第236回高大連携教育フォーラム 【第2期】第2分科会

感じている
モヤモヤ①
～対 校外～

自分の常識・当たり前(ここまではやるでしょ)をいかに排除して、伝えられるか。理解していただくか

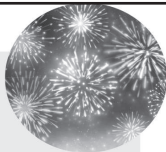
- ✓ 伝達不足・コミュニケーションエラー
- ✓ 「思ったんと違う…！」
- ✓ ボランタリーになりがち。

金銭以外の対価をいかに提供できるか

スライド 13

第23回高大連携教育フォーラム 【第2部】 第2分科会

感じている
モヤモヤ②
～対 校内～



- ✓ 大規模校での進め方・浸透のさせ方
- ✓ 外部で学んだこと・日常の学びの橋掛け
(教科横断型の学びの仕掛けづくり)
- ✓ 体制の組み方
(教員の主体性を奪ってない…?)
- ✓ 自分の役割

スライド 14

第23回高大連携教育フォーラム 【第2部】 第2分科会

基本スタンス

- 現場によって課題・モヤモヤはあって当たり前
- うまくいかないのが当たり前
- 今あるリソースで最大値を狙うにはどうしたらいいか
- 考えて実行に移すのみ

スライド 15

第23回高大連携教育フォーラム 【第2部】 第2分科会

ご清聴ありがとうございました。

ご意見・ご質問などいつでもお寄せください。
京都橘中学校・高等学校
探究学習コーディネーター主任
長谷川 夕起
yu.hasegawa@tachibana-hs.jp

スライド 1

発表スライド 高大連：コンソーシアム京都

世代と立場を越えて学びを編みなおす
- すぐき濱けプロジェクトを中心に -



沼田 和也 (同志社中学校/2025.12.06)

スライド 2

自己紹介

勤務先 同志社中学
教科 技術科
役職 長期計画委員会委員長・教頭

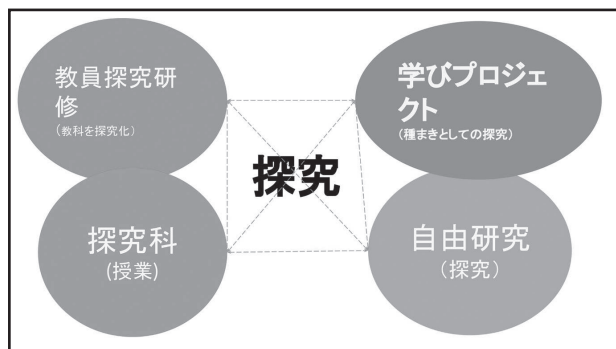
所属 大阪工業大学 (非常勤)、土木学会、
技術教育研究会、個性化教育学会、
子どもの遊びと手の労働研究会、
産業技術教育学会



↑書いてきたもののリンク集
<https://sites.google.com/doshisha-is.ed.jp/knumata/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

学内：新しい放課後の提案としての「学びプロジェクト」の試作を 12 年前より続けている。
学外：アジアを中心にものづくりや科学技術をきっかけにして国際交流をつづけている。アボなしの飛び込み営業に可能性を感じている。自分の等身大の人脈で手作りで。

スライド 3



スライド 4

考えていること

【ヒト】いかにつながりをつくるか
【モノ】教材、題材をつなげる
【コト】正課・正課外でモノとヒトが出会う
【カネ】助成金、個人支払い

【モヤモヤ】費用、熱量×予定、参加×純粋

「学校教育といえば授業」とは限らない
授業が学校のゴールではない
「探究」風の取り組み

スライド 5

【個人活動】



Asia STEAM Camp

米国、豪州、アジア中心
アボなし飛び込み営業
→ 虎の巻はこちら
英語以外の営業が大変

スライド 6

【個人活動】



同志社中学校
学びプロジェクト
国際ロボットコンテスト
Report

国や言葉を越えて。
共に考え、共に作るう！

Robo STEAM 2016 in Doshisha

スライド 7



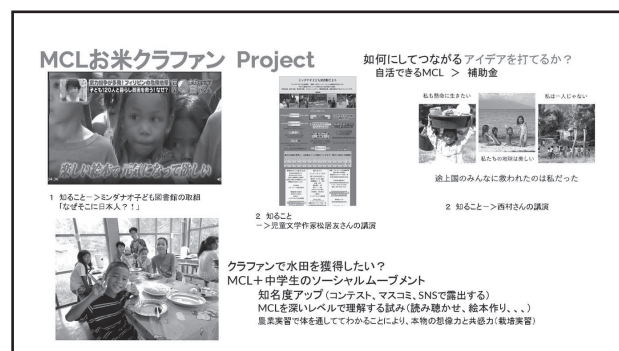
スライド 8



スライド 9



スライド 10



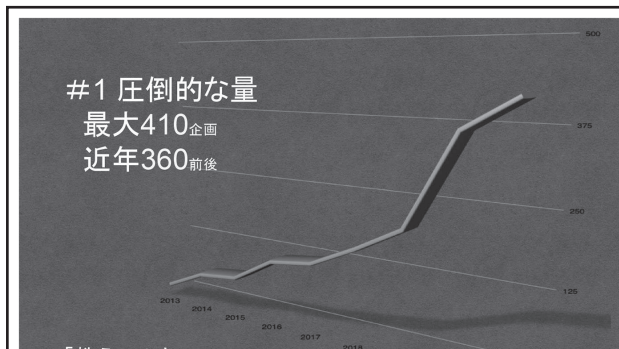
スライド 11



スライド 12



スライド 13



スライド 14



スライド 15

#2 実社会の本物の
人々となつがる

「失敗を恐れて動き出すのが怖い時も
あるけれど最初から成功しようと思わ
ず、失敗を大切に失敗から何かを学ば
うという姿勢が大切で、成功しようなん
て思わなくていいと思わせてくれるお話
で、とても印象に残りました。」(Toyao)

伊藤羊一さんの
白熱教室
in 同志社中学校

12/22(火)
10:00~11:30 zoom

スライド 16

Space Hour
2022年11月12日(土)13:30-14:30
ZOOM Meeting

Dream More
3/17(Sat) 14:00-15:00 Zoom
足立寛和氏

スライド 17

ゆりかご水田の
講義と試食会
TECHSDGs / 2019.11.14

もし京都に残っ
て、観光に関わ
る仕事をすると
したら、どんな
仕事に就きたい
か？
TECHSDGs / 2023.6.23

京つけもの「も
り」
TECHSDGs / 2023.6.2

スライド 18

苗木プロジェク
ト2
TECHSDGs / 2019.11.15

コミュニケーションツールの製品づくり1
ヒト・モノ・コト・お食を繋ぎあわせてソーシャル・デザ
イン
TECHSDGs / 2023.6.23

食品ロスから考
えるSDGs Action
SDGs 食糧問題SDGs / 2019.12.24

スライド 19

C 立場や国境を超えて交流

ウクライナからやってきた INNAさん

渋谷:文化村通り



スライド 20

D 生徒から内容をリクエスト

・ハングル講座があって、なんで中国語がないんですか？！

・たいだいこの学校は、環境問題に対するコンテンツが少なすぎます！！

・なんで1年生には発表の機会がないんですか！！

オンライン国際交流 with 台湾



スライド 21

ヘブライ語

いそべ けいと

לֵךְ אֶת הַדָּבָר

スライド 22

F 生徒から生徒へ学びを広げる

講師をやった生徒の気づきnote

「僕は実は学びプロジェクトに参加したことがありませんでした。なのに自分で参加する前に講師として参加したことに驚き、それと同時にとても嬉しくもありました。受講してくれた子達もとてもいい子たちで、自分で教えていてとても楽しかったです。自分がいつも遊び感覚でやっていたことが知らぬうちに誰かのために役に立てて嬉しかったです。」(3年)



スライド 23

F 社会課題・地域課題へのアプローチ

八幡前プロジェクト

すぐき漬けプロジェクト

お米プロジェクト

(パッションフルーツ・プロジェクト)

(ウガンダ JICAプロジェクト)

スライド 24

八幡前プロジェクト

同志社中学校 × 叡山電車 八幡前駅プロジェクト

ABOUT VISION MEDIA PHOTO

八幡前駅プロジェクト #ココアツ



スライド 25

すぐき漬けプロジェクト

「どうにかしたいのですが、」
農家、栽培、プランティング、グルメ開発、ソー
シャルムーブメント、インベーション、地域文化（振
り売り）、動画発信、

ZOOMでは白熱した議論
「やめたくない」
「あつという間に1時間半経ったんや！」
「なんか、夕飯来いって言うてはなんねん。ほっとい
て」
ご飯より学プロ。

すぐき漬けの食文化を
絶やさないプロジェク
ト

TECH@DHS / 2020.6.23

スライド 26



スライド 27

すぐき漬けクイズ

スライド 28

社会を変える、すぐき漬けプロジェクト

賀茂川
すぐき畑
について

19. 8.1 - 24.8.1

ゆるゆる塾 3年高橋さん

京都三大漬物の魅力を全国に

第4回関西SDGsユースアクション2022にて高橋さん
が発表しました。

スライド 29

グッズ販売

グッズ販売の計画

1. グッズの種類を決める

2. グッズのデザインを考える

3. グッズの制作会社を探す

4. グッズの制作費を計算する

5. グッズの販売場所を決める

6. グッズの販売時期を決める

7. グッズの販売方法を考える

8. グッズの販売準備をする

9. グッズの販売を開始する

10. グッズの販売結果を振り返る

スライド 30

LINEスタンプ

スライド 31

デジタル書籍

第 1 章

すぐきとは何？

すぐきについて知ろう

まず最初の章ではすぐきの豆知識などについて紹介しています。

スライド 32

レジュメ

大学の先生に喋ってもらったら
質問が終わらない。。。
「こんなに知識を持ったすごい
すごい大人がいるんだ。。。」



すきくらむチャウダー
300 回視聴・6 か月前

動画

スライド 33

すぐきプロジェクト

ホーム

知ってる？すぐき

守ろうすぐき！

すぐきプロジェクト

同志社中学生在が社会課題にコミット！！

すぐき漬けの食文化を絶やさないプロジェクト

スライド 34

スライド 35

[illegible]

スライド 36

スライド 37



スライド 38

学びプロジェクトの分類

A	教職員から生徒へ提供
B	社会(本物の大人との出会い)を提供
C	立場や国境を超えて交流
D	生徒から内容をリクエスト
E	生徒から生徒へ学びを広げる
F	社会課題・地域課題へのアプローチ

スライド 39

小さく初めてみただけ(無計画)の手作り

八幡前プロジェクト

駅員→学校に訪問 生徒に有志募集(事務職員)

ミーティング(実行)ミーティング

国交交通省から助成金

パッションフルーツ

非常勤講師経営 ポランティア

話を聞きに行く

授業と学びプロジェクト企画

ウガンダ ナッツプロジェクト

偶然の出会いから小さくはじめる

交流

すぐきづけプロジェクト

東京から一歩外へ行く

1. 授業時間(授業、準備、実行)

2. 発表

ミーティング(実行)ミーティング

制作(準備)発表(実行)

ミーティング(実行)ミーティング

MCL絵本プロジェクト

偶然の出会いから小さくはじめる

対面 オンライン交流

定期的なミーティング

できることラファン広める

スライド 40

はみ出したものにこそ本質がある

#1 立場や年齢や国境もこえる自由
 #2 呪縛から解放 フラットを感じ自分の小ささ(多少の経験)
 #3 共にスコアは不要になる

スライド 41

今週動き出した案件

熊野筆

HOME > Calligraphy brushes > JAPAN BLUE Kumano brush "KACHIRO" Small Brush

JAPAN BLUE Kumano brush "KACHIRO" Small Brush

This SDGs product is made by collecting used plastic morning glory pots from elementary and junior high schools and upcycling them into the handles of Kumano brush.

The tips of the brushes are carefully crafted one by one using Kumano brush techniques, and are characterized by their excellent hold. The pentagonal handle, which symbolizes passing a exam, is knurled with natural indigo from Tokushima to express the Japanese Blue "KACHIRO". This product utilizes natural indigo from Tokushima to express the "KACHIRO" color (aka chiro), a brown color, and can be purchased as a lucky charm or gift.

What is "KACHIRO" (brown)? Long ago, during the Sengoku period, warlords would wear indigo-dyed clothing under their armor in "kachi" (brown) indigo, which was highly valued as a auspicious color that brought good luck and victory in battles, as well as the antibacterial and insect-repellent properties of indigo dye.

JAPAN BLUE Kumano brush "KACHIRO" was developed through a co-creation program between P&H Co., Ltd. and KOTOBUKI Co., Ltd. → [Link](#)

スライド 42

教育活動の作り方の根底の思想に埋め込みたい

野性的な学び

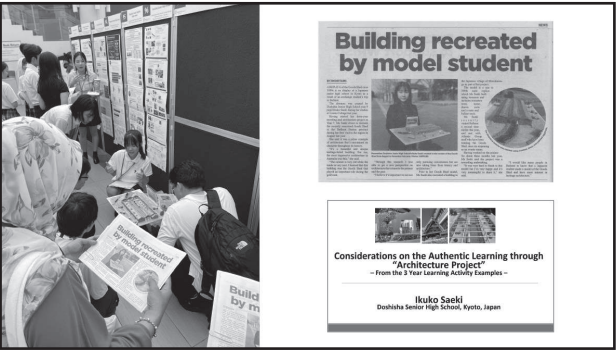
教科学習 自由研究(探求) 国際交流 行事・旅行

感性OS(学びプロジェクト)

「授業」は、広く国民に〇〇を提供する力強いシステム
 制約やきつい

授業外は、制約がないが、強制力はない

スライド 43



スライド 44

考えていること

【ヒト】いかにつながりをつくるか
【モノ】教材、題材
【コト】正課・正課外でモノとヒトが出会う
【カネ】助成金、個人支払い、会社のために

【モヤモヤ】費用、熱量×予定、参加者数×純粋度
知識・スキル向上、英語×論文

スライド 45

気づき

なくなることも否定しない。
継続ありきなら、授業のちからしかない。

探究のためにはではない。教員が、輝くには。教える職業を選んだ大人が、輝く。

授業外から出発した。しかし、授業が持つちからを再認識

授業で営業していいよ！放課後、営業していいよ！
講演ではなく、営業活動として会社から許可をとってもらう

スライド 46

つながるきっかけ
～すでに足元に～

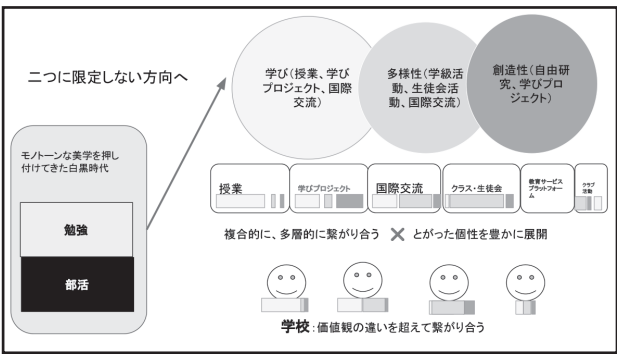
スライド 47

海外とつながる虎の巻

Report on school visits on the West Coast of the U.S.
—Nueva, Pacific Academy, High Tech High—

KAZUYA NUMATA
(Doshisha junior high school)

スライド 48



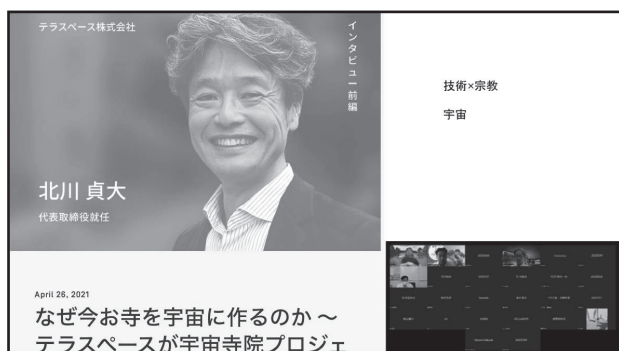
スライド 55



スライド 56



スライド 57



スライド 58



スライド 59



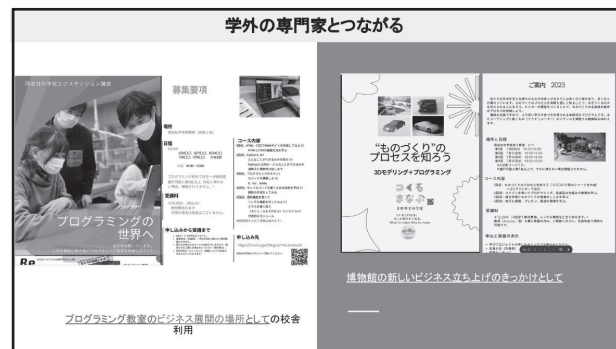
スライド 60



スライド 67



スライド 68



特別分科会 ①

総合型選抜における探究活動の評価をどうするか？

ー ルーブリックの作成をきっかけにー

[報 告 者] 杉森 公一（北陸大学 高等教育推進センター センター長・教授）

[コーディネーター] 柿本 航（佛教大学 入学部 入学課 課長）

[コーディネーター] 森岡 大樹（京都女子大学 教育・学生支援部学生支援課 課長）

探究的な学びで育まれた資質・能力を大学でどう伸ばすかを再考し、高大接続の強化と入学者選抜の改善が求められている。分科会では、大学教育への円滑な移行を目指し、評価の意義やルーブリックの必要性・作成について議論する。

概 略

本分科会は「総合型選抜における探究活動の評価をどうするか ― ルーブリックの作成をきっかけに」を主題に、探究で培われた資質・能力を大学でどのように受け取り、入学後の学び（入学前教育を含む）へどのように連続させるかを中心に位置づけた。

冒頭では、志望理由書・活動報告書・学びの計画書といった提出課題について、アドミッション・ポリシーに即した“問い”となっているか、また受験生にとって大学での学びの入口として機能しているかを点検する視点を提示した。

続いて、金沢大学における高大接続プログラム（入学前に「高校での学び」「大学での学び」を可視化するレポートとルーブリックの事前提示）や、北陸大学「21世紀型スキル入試」の改革事例を取り上げ、入試改革のタイプ（合格者を変えたい／入学前に育てたい／メッセージを変えたい／受験機会を増やしたい）に応じて、大学が投げかける問いの設計を再考する重要性を示した。

また、評価方法については、客観テスト・自由記述・パフォーマンス課題などを組み合わせる発想を前提に、信頼性・客観性・妥当性・効率性の観点を踏まえながら、志望理由書等の読み取りにルーブリックを用いる意義（観点・尺度・基準の設計、分析的ルーブリックの進め方）を整理した。

最後に、志望理由書を題材としたルーブリック作成（高校・大学別の評価観点は、後述の表に記載）の体験を通じて、大学の教育理念を可視化しつつ、高大で共有可能な評価の言語を整えることが本分科会の狙いであることを明確にした。

全体討論の内容

本分科会は、総合型選抜の拡大を背景に「大学の問い設計」と「評価の透明化」を再考することを目的として実施された。冒頭の講演では、高校での探究活動と大学の学びを連続させる視点から、志望理由書・入学前レポート・面接等における問いの再設計、さらに評価手法（客観テスト・自由記述・パフォーマンス課題・観察型評価）の特徴と使い分けが整理された。続いて、参加者は提示されたPPTテンプレートを用いながら、志望理由書の評価ルーブリックを実際に作成するワークに取り組んだ。まず班内で「大学として学生に何を求めているのか」「志望理由書に表れてほしい学びの姿は

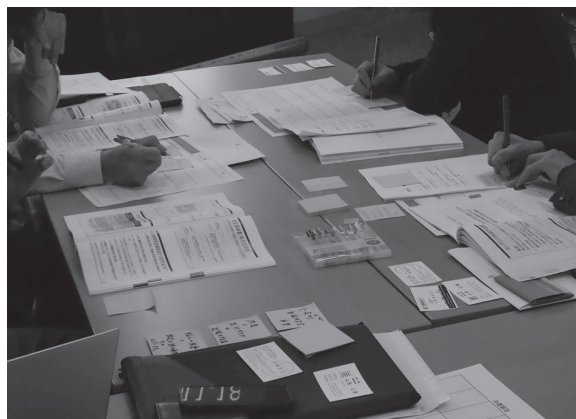
何か」を話し合い、挙げた要素を付箋等で列挙した。次に、それらをグルーピングし、「意見の表明」「学ぶ環境への理解」「探究・協働を通じた成長」「文章構成・形式」などの評価観点に整理したうえで、3～4段階の尺度と言語化を行った。特に、隣接する水準の違いを明確に書くこと、記述がそのまま採点の根拠になるよう具体性を持たせることに留意し、班ごとに議論をしながら、基準表を個人で完成させた。その後の全体討論では、高校での記述の多様性を前提に「大学側が何を読み取りたいかを先に提示すべき」との意見が多く、高大接続プログラムにおける“ルーブリック事前提示”の有効性が共有された。また、形成的評価では多様な情報を重視しつつ、総括的評価では信頼性・客観性の確保が重要である点も確認された。最終的に、ルーブリックは合否判定のための手段にとどまらず、大学が社会に発する教育理念のメッセージであり、高校の探究活動へ還流する「共通言語」となるとの認識で一致した。

到達点と今後の課題

本分科会の到達点として、まず 探究活動を基盤とする総合型選抜において、大学が求める「学びの姿」を明確にし、それを受験生へ問いとして提示する設計が不可欠であるとの認識が高大双方で共有された点が挙げられる。講演で示された高大接続プログラムや入学前教育の事例（入学前レポートとルーブリックの事前提示、オンライン交流、面談型支援等）は、探究で培われた主体性・思考力・協働性を大学がどのように受容し、入学後の成長につなげるかを示す具体例となり、選抜と教育の一体化を考える上で大きな示唆を与えた。

また、志望理由書や活動報告書に対する「問いの構造化」によって、受験生の思考の深まり、学ぶ動機、将来展望、探究プロセスを読み取る手掛かりが整理され、大学教育の理念が選抜段階に反映される枠組みが明確になった。さらに、講演で示されたように、客観テスト・自由記述・パフォーマンス課題・観察／対話の評価を目的に応じて組み合わせ、形成的評価では多様な評価情報を重視し、総括的評価では信頼性・客観性を確保するという整理は、評価設計の共通基盤として有効であることが確認された。

一方の課題として、高校の探究活動はテーマや記述の様式が多様であり、大学が求める観点との不一致が生じやすい現状が共有された。これを補うためには、TILT（学びの透明化）の考え方を援用し、課題の学習目標と設計根拠、問いの意図・評価基準を明確化し、ルーブリックを高大の共通言語として整備する取り組みを、選抜段階でも可視化することが有効である。また、大学が提示する問いが高校現場でどのように理解され、探究指導にどう影響しているかを継続的に検証する仕組みが求められる。加えて、入学前課題や面談等を通じた「入学前に育てる」アプローチを学部レベルで拡充し、探究を基盤とした総合型選抜を単なる選抜手法にとどめず、入学後の学びへの接続点として機能させる制度的整備が今後一層必要となる。



スライド 1

第23回 高大連携教育フォーラム 分科会（特別分科会① 高大接続）
2025年12月6日（土）14：30～16：30

総合型選抜における探究活動の
評価はどういうものか？
ルーブリックの作成をきっかけに

コーディネーター
佛教大学入学部入学課 課長 柿本 航
京都女子大学教育・学生支援部学生支援課
課長 森岡 大樹

スライド 2

開催目的：探究的な学びで育まれた資質・能力を大学でどう伸ばすかを再考し、高大接続の強化と入学選抜の改善が求められている。分科会では、大学教育への円滑な移行を目指し、評価の意義やルーブリックの必要性・作成について議論する。

タイムスケジュール：

・趣旨・概要説明	14：30～14：40
・ご講演 「講演テーマ 総合型選抜における探究活動の評価をどうするか？ ～ルーブリックの作成をきっかけに～」	14：40～15：40（60分程度）
・個人ワーク 「志望理由書のルーブリックを作成してみよう」	15：40～16：00
・ワーク内容の発表	16：00～16：20
・まとめ	16：20～16：30

スライド 3

21世紀を生き抜くチカラ。
北陸大学
HOKURIKU UNIVERSITY

杉森 公一 先生
北陸大学 高等教育推進センター長

筑波大学修士(教育学)、金沢大学博士(理学)

筑波大学 第一学群自然科学類卒業
筑波大学大学院 修士課程教育研究科修了
金沢大学大学院 自然科学研究科
博士後期課程修了

金城大学研究員、金城大学医療健康学部助手、同助教、金沢大学大学教育開発・支援センター准教授、金沢大学国際基幹教育院高等教育開発・支援部門准教授、タフツ大学CELT客員研究員を経て2021年4月より現職
専門は計算量子化学、理科教育および大学教育開発

学生の成長力 No.1

スライド 1

北陸大学 高等教育推進センター
Center for the Advancement of Higher Education

21世紀を生き抜くチカラ。 北陸大学
HOKURIKU UNIVERSITY

総合型選抜における探究活動の評価をどうするか？
— ルーブリックの作成をきっかけに —

2025.12.6 高大連携教育フォーラム特別分科会①【当日提示】

杉森 公一 Kimikazu SUGIMORI, PhD, MEdu
北陸大学 高等教育推進センター センター長・教授
Director, Center for the Advancement of Higher Education, Hokuriku Univ.
<https://cahe.hokuriku-u.ac.jp/>

スライド 2

概要

- 総合型選抜・学校推薦型選抜での入学者が増加する現在、大学が受験生に課している志望理由書や活動報告書、学びの計画書など各提出課題は、アドミッション・ポリシーに沿った問いとなっているだろうか、また、自大学で学び入り口となっているだろうか。
- 探究的な学びで育まれた資質・能力を大学でどう伸ばすかを再考し、高大接続の強化と入学者選抜の改善が求められている。本分科会では、大学教育への円滑な移行を目指し、評価の意義やルーブリックの必要性・作成について議論する。

2

スライド 3

金沢大学 高大接続
ラウンドテーブル(第1回)
2021年11月17日(水)
※参加費 12,000円(税別)
※参加者 高校生・大学生

金沢大学 高大接続
ラウンドテーブル(第2回)
2021年12月1日(水)
※参加費 12,000円(税別)
※参加者 高校生・大学生

KUGSラウンドテーブル
「自分と社会をつなぐ探究～社会の課題を自分ごとにするには?～」
2021年9月10日(日) 9:00～16:45
会場：金沢大学豊田キャンパス
金沢大学大講義棟
伊田館：特別1

高校生と大学生、高校教員と大学教員が同じテーブルに
高校と大学の接続そのものを探究し、つぎに試み

高校生(受験生)を大学生に転換させる、問いと仕掛け＝接続型入試の設計

高大接続の事例と類型：
高校と大学を「探究」で結ぶ

スライド 4

⇒高大接続プログラム - 金沢大学(2021～)

KUGS高大接続プログラム

高大接続コア・センター

- ・Webセミナー オンライン
- ・Liveセミナー 対面
- ・高大接続ラウンドテーブル
多様な他者との議論・交流

入学前2種のレポート提出
*「高校での学び」
*「大学での学び」
(ルーブリックの事前提示)
→ 学ぶ力を育成・接続する

金沢大学は、2021(令和3)年度入試から、「KUGS特別入試」を実施します。これに先駆け、金沢大学高大接続コア・センターは、2019年度から高校生対象の「KUGS高大接続プログラム」を開始します。本プログラムでは、セミナー等様々な探究の学びの機会を提供します。セミナー等の受講後、定められた課題を提出し、金沢大学から評価を受けた方には「KUGS特別入試」の出願資格が与えられます。皆さんの参加をお待ちしています。

4

スライド 5

⇒21世紀型スキル入試 - 北陸大学(2020～)

2020年度 入学者選抜

21世紀型

医療人育成
薬学部、医療看護学部

スキル育成
経済経営学部、国際コミュニケーション学部

AO選抜

北陸大学

A 合格者を変えたい
筑波大・京都工芸繊維大・敬啓大 等

B 入学前に育てたい
京都工芸繊維大・島根大・産業能率大 等
北陸大

C メッセージを変えたい
東京都市大・金沢大・佐賀大 等
北陸大

D 受験機会を増やしたい
桜美林大・京都文教大・筑紫女学園大

スライド 6

タイプに応じた、受験生の問いの明確化

入試改革のタイプ (実際には複合的に追求)	意図	実践例
A 合格者を変えたい	従来の入試方法では選抜できない、多様な資質・個性を持つ学生を獲得	課題解決力、伸びしろ、多様性、個性、意欲などを評価。書類・面接・探究学習の成果等を活用
B 入学前に育てたい	入学後のスムーズな移行・学習意欲の向上	入学前課題・面談・オンライン学習・上級生との交流による育成的支援
C メッセージを変えたい	大学の教育理念や求める学生像を社会に発信し、志願者層を変える	高校生向けプログラムや要項を通じてメッセージを可視化。志望理由書や面接での教育理念に基づく問いかけ
D 受験機会を増やしたい	志願者増加・定員確保のための多様な入試方式の提供	年内入試の拡大、入試方式の多様化(実演・探究活動・グループ討議等)

スライド 7

志望理由書(総合型選抜)

APを具体化するための問い「高校での学びから大学での学びへ」

1. 高校時代などこれまでの最も力を注いで取り組んだ活動の内容とその成果について記してください。

(1) 学習活動について

高校までの学習活動の経験を問い、入学前教育(プレレジュ、先取り履修)を制度化

→ 学力保護や大学生活への適応準備を目的とする

(2) 学習以外の活動について

入学前課題(レポート、eラーニングなど)を通じた学習習慣の形成

→ 学部ごとの入学前面談やガイダンスによる進路意識の明確化と進路意識・職業理解の強化

4. 北陸大学入学後の学習について記してください。

(1) 北陸大学でどのような力を身につけたいと考えていますか。

大学の教育理念・学びの姿勢を表す「メッセージ」として動機・意欲・将来展望などを重視し、「主体性・協働性・課題解決力」など非認知能力に価値を置くことを伝える

「なぜこの分野を学びたいのか」「どのように学びたいのか」→ 面接でも確認

(2) その力を身につけるために、4年間をどのように学習したいと考えていますか。

薬学部・医療保健学部では、地域貢献やチーム医療への理解を前提とした、将来の医療者像についての問いも課される

→ これらの受験生への問いによって、「地域医療人材の育成」「主体的学習者の育成」といった北陸大学の教育ビジョンの可視化が図られる

スライド 8

課題の透明性を高める7つの方法(TILT)

1. 学生が各課題を始める前に、課題の学習目標と設計の根拠を話し合う。
2. 授業の計画、議題の作成に学生を参加させる。
3. 授業中に、教えた概念を応用するような問題で、学生の理解度をピアワークで測る。
4. 学生が困難な転機(transition points)に取り組んでいる場合に、「どのように人は学ぶのか」の知見を授業活動に明示的に結びつける。
5. 採点基準に照らして、課題に取り組むよう学生に働きかける。
6. 採点したテストや課題を授業で振り返る。
7. 授業中の議論について、どのような思考様式や学問的手法が用いられていたのかをコメントする。

出典: Transparency in Learning and Teaching project
<https://tilthighered.com/transparency>

スライド 9

目標に対応した評価方法(梶田2010)

	知識・理解	思考・判断	技能	関心・意欲	態度
客観テスト	◎	○			
記述テスト	○	◎			
レポート	○	◎	○	○	◎
観察法	○	○	◎	◎	○
口頭(面接)	◎	◎		◎	○
質問紙法				◎	○
実演		○	◎	○	○
ポートフォリオ			○	○	○

スライド 10

様々な評価方法

筆記による評価 (筆記試験、ワークシートなど)		パフォーマンス課題による評価		観察や対話による評価
「客観テスト」式	自由記述式	完成作品の評価	実演の評価 (実技試験)	プロセスに焦点を あてる評価
☐ 多肢選択問題 ☐ 正誤問題 ☐ 順序問題 ☐ 組合せ問題 ☐ 穴埋め問題 (単語、句)	☐ 短答問題 (文章、段落、図表など) ☐ 知識を与えて推論させる方法 ☐ 作問法 ☐ 認知的葛藤法 ☐ 予測一般型 ☐ 説明(POE)法 ☐ 概念マップ法 ☐ ペン図法 ☐ KJ法 ☐ 運勢ライン法 ☐ 描画法	☐ エッセイ、小論文 ☐ 研究レポート、研究論文 ☐ 絵、図表 ☐ 実験レポート ☐ ソフトウェアのデザイン ☐ ビデオ、録音テープ	☐ 朗読 ☐ 口頭発表 ☐ ディベート ☐ 実験器具の操作 ☐ コンピュータの操作 ☐ 実習授業 ☐ チームワーク	☐ 活動の観察 ☐ 発問 ☐ 討論 ☐ 検討会 ☐ 面接 ☐ 口頭試問 ☐ ノート・日誌・日記
幅広い学力を評価するためには色々な方法を組み合わせる必要がある どの方法を用いるかは、教員が本当は何を重視しているかを暗黙のうちに学生に伝える		☐ プロジェクト ☐ ポートフォリオ評価法		

(大高泉編著 2013, p.187 を改変)

スライド 11

どの評価方法にするのか

評価方法を考えるうえでの4つの観点

- 信頼性
同じ学生に対して同じ条件のもと複数回実施しても、同じような結果がでるか
- 客観性／比較可能性
複数の評価者間で(評価者が変わっても)結果が一致するか
- 妥当性
評価方法は、学習目標(=評価しようとする成果)に照らして妥当か
- 効率性
評価の実施や採点が時間的・経済的に実用的であるか

⇒ 総括的評価では信頼性・客観性の確保をより重視
 形成的評価では多様な評価情報を得ることを重視

スライド 12

さまざまな評価方法の長所と短所

	長所	短所
客観テスト式	・ 解答の正誤が判断しやすい ・ 採点が容易 ・ 信頼性・客観性が高い ・ 効率性が高い(時間・人数)	・ 学習者が本当に理解しているかが見えにくい ・ 妥当性の問題(適さない場合が多い) ・ 真正性の問題
自由記述式	・ 学習者の理解や考えが反映されやすい ・ 診断的評価、形成的評価にも有効	・ 点数化しにくく採点が比較的に困難 ・ 信頼性、客観性の問題 ・ 効率性がやや低い
パフォーマンス課題	・ 真正性を保証しやすい ・ 形成的評価に有効 ・ 学習を促したり調整したりするのに有効	・ 点数化しにくく採点が比較的に困難 ・ 信頼性、客観性の問題 ・ 効率性が低い(長時間)

→ いかにより信頼性、客観性、効率性を高めるか

スライド 19

2. リストの作成 (15分→グループで相談)

- 志望理由書の具体的内容、
志望理由書を完成したときに達成できる学習目標
やすぐれた成果物
→ 各目標に対して期待される最も高いレベルは？
→ 最も優れた志望理由書の特徴・徴候は？
- 付箋1枚に1項目ずつ書いていきましょう

3. グループ化と見出し付け / 4. 表の作成

期待される事項をグループ化、名前を付ける＝評価観点
(10分→グループで相談)

19

スライド 20

ルーブリックのテンプレート		氏名・所属:	班:
課題 (入試種別・志望理由書の名称:)			
評価尺度			
評価観点			

スライド 21

参考文献

杉森公一 (2022-2023) 「連載: 教えるを学ぶエッセンス」週刊医学界新聞, 第1回～第12回
<https://www.isaku-shoin.co.jp/paper/series/203>

令和5年度文部科学省の先導的の大学改革推進委託事業「大学入学者選抜における総合型選抜の導入効果に関する調査研究」, https://www.mext.go.jp/content/20240426-mxt_daigakuc01-000035712_2.pdf

Winkelmes, M.-A. (2019) "Transparent Design in Higher Education Teaching and Leadership", Routledge.

The Transparency in Learning and Teaching project. <https://www.tlthighered.com/>

杉森公一 (2014) 連載: ルーブリックが結ぶ教育接続, 『文部科学教育通信』, ジアース教育新社

大高泉編著 (2013) 『新しい学びを拓く理科—授業の理論と実践 (中学・高等学校編)—』ミネルヴァ書房。

石井英真 (2015) 「教育評価の立場」西岡加名恵・石井英真・田中耕治編『新しい教育評価入門—人を育てる評価のために—』有斐閣コンバクト, pp.23-49

ダネル・スティブンス&アントニア・レビ著, 佐藤浩章監訳 (2013-2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』, 玉川大学出版部

田中耕治編 (2010) 『よくわかる教育評価 (第2版)』ミネルヴァ書房

西岡加名恵 (2016) 『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか—』図書文化ダイア・ハート著, 田中耕治監訳 (2012) 『パフォーマンス評価入門—「真正の評価」論からの提案—』ミネルヴァ書房

松下佳代 (2012) 「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究』第18号, pp.75-114. <http://hdl.handle.net/2433/169740>

権田敬一 (2010) 『教育評価 (第2版補訂2版)』有斐閣

Bain, K. (2012) What the Best College Students Do, Harvard University Press. (バイン (著)・藤井良江 (訳)) (2014) 『世界を変えるエリートは何をどう学んできたのか?』日本実業出版社

21

スライド 22

ポスト・ルーブリックに向けて

- 「ルーブリックを飼い慣らす」(松下2025)
— 成果物を集める or 評価者間の調整 (モデレーション)
- 脱評価 (Ungrading) の視点 (S. Blum2020)
発達段階のルーブリック
高いパフォーマンスに向かうためのガイドとして

採点指針のルーブリック シングルポイント (一点)・ルーブリック
 最高の評価基準のみ 中間の評価基準のみ

課題	レベル3 (優)	レベル2 (良)	レベル1 (可)	
観点1	...	...	...	評価基準は示さない
観点2	...	...	...	

松下佳代ら編著 (2025) 『ライティング教育の可能性』勁草書房 / Blum, S (2020) "Ungrading" West Virginia

22

スライド 23

補遺

まとめに代えて

スライド 24

「測る」「量る」「秤」をこえて

測量しようとしている学習成果 (Output・Outcome ≠ 学力) は誰のものか、なぜ重要か、測定執着に囚われていないか

Diversity, Equity, and Inclusion (多様性の包摂と公正)
 ≠ Equality (公平性)

- 学生の学びは測量できるのか、してよいのか?
- 卒業証書・学位の通用性と、その結果として教育の説明責任は?

目指す学びは

生徒・学生が自らを知り、自律的な学習を続けていくこと
 生徒・学生が社会を形成する主体となること
 学習成果、学習能力の育成の機会で、明示的に問い、
 多様に、多面的に、多元的に、仕掛けていくこと
 ... (ものさしとなる入試は、その「結果」でしか、ない)

24

第 23 回高大連携教育フォーラム

総合型選抜における志望理由書のルーブリック作成で高校・大学別に挙げた評価観点					
大項目	高校	大学	小項目	高校	大学
大学理解	○	○	大学の育成像を理解している	○	
			大学の教育の特徴を理解している	○	○
			大学の強みを理解している	○	
			A P と本人との整合性がある	○	○
幅広い教養		○	有している		○
基礎的教科学習知識・技術		○	有している		○
専攻分野の専門を学ぶ意欲		○	有している		○
			論文やレポート作成の経験がある		○
			関心ある領域に関わる勉強会等のイベントに参加したことがある		○
			大学で行きたい分野の理解ができている		○
			研究室について調べている		○
			関心ある講義を見つけている		○
			関心ある講義のシラバスを確認している		○
複数分野への理解		○	有している		○
理解力（学習面）		○	有している		○
主体性	○	○	将来に必要な力を身につけている	○	
			主体的活動の経験を語れる	○	
			自分の意見や疑問をまとめることができる		○
			自律的学習姿勢を有している		○
問題意識	○		有している	○	
リーダーシップ		○	活動等でのリーダー経験が豊富である		○
シチズンシップ		○	有している		○
行動力		○	現状の自分を越えた体験		○
			疑問をすぐに調べて確認する習慣がある		○
意欲	○	○	学習する意欲がある		○
			自分の言葉で熱意が語られている	○	
人間性の基礎素養 (自己・利他・尊敬)		○	有している		○
独自性	○		オリジナリティがある	○	
他者協働・協調性		○	有している		○
ストレスコントロール力		○	有している		○
高校までの学びの自己分析	○	○	自分をリフレクションできている		○
			学校で頑張ったことを語れる	○	
			これまでの学びの目的・プロセス・結果が明確	○	
			関心やテーマに関わる体験が明確にある		○
			成長ポイントが明確	○	
			失敗の分析とその理解	○	
			好き・得意分析ができている	○	
			社会で活躍し、貢献の経験がある		○
入学後の目標・計画	○	○	高校での探究活動が具体的に記述されている	○	
			卒業後、将来の目標・ビジョンが明確にある	○	○
			卒業後、どのように社会貢献するか語れる	○	
			何を学びたいか明確にある	○	○
			何をしたいか明確にある	○	
			大学での研究テーマが明確にある		○
			研究テーマについての文献を挙げられる		○
			学びたい、やりたいことが志望している大学学部学科にある	○	○
			高校時代の学びや活動と大学での学びがつながる	○	○
			研究活動の計画が実行可能である	○	
			目標実現までの計画(ステップ)がある	○	
読みやすさ・構成	○	○	表現力	○	○
			論理的思考	○	○
			自分の言葉で語っている	○	
			根拠をもって語っている	○	
			文章量		○
			文字の丁寧さ		○

特別分科会 ②

高校・大学がともに考える探究の「モヤモヤ」

－大学生が語る探究のモヤモヤ、探究を支える大学生の挑戦－

- [報 告 者] 小村 柊翔 (龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生)
[報 告 者] 大見 智美 (京都工芸繊維大学 工芸科学部 応用生物学課程 2回生)
[報 告 者] 大橋 未都 (京都工芸繊維大学 工芸科学部 応用生物学課程 2回生)
[報 告 者] 花登 淳平 (京都府立須知高等学校 教諭)
[コーディネーター] 滋野 哲秀 (聖ヨゼフ学園 日星高等学校 校長／元 龍谷大学 文学部 教授)

探究学習は生徒が問いをつくり探究していく活動である。かつての学校では教員が生徒に問うというスタイルが中心だったが、生徒が問いをつくるという探究の過程は、生徒にとっても教員にとっても「モヤモヤ」が生まれる。大学生が自主的に高校の探究学習に関わっている事例や探究学習を経験した大学生の「高校時代のモヤモヤ」を共有し、探究の質を向上させるために高校、大学ができることは何かを議論する。

概 略

コーディネーターからこの分科会の趣旨説明を行い、探究についての課題をカリキュラムや教員の伴走、学校の組織等の視点から説明した。その後、4人の報告者から1人10分程度の報告をしてもらった。

京都工芸繊維大学の学生2人からは、高校で取り組んできた探究の内容について報告、龍谷大学の学生からは、高校生の探究サポートにかかわる大学生の事例をココカラストUDIO(高校生マイプロジェクト)、龍大クエスト(探究をサポートする龍谷大学の学生メンバー)、認定NPO法人カタリバ(学校横断型探究プロジェクト)での経験をもとに探究伴走のモヤモヤを報告、高校教員からは教員として感じている探究の課題を生徒の現状、教員の生徒へのアプローチや連携、校務分掌組織、生徒の探究の観取といった校内の現状について課題を報告してもらった。

4名の報告のあと、テーブルごとに参加者同士の自己紹介を含めた情報交換の時間を少し取りながら報告者に対する質問を各テーブルから出してもらい、質疑応答を繰り返しながら高校現場での探究についてのモヤモヤ、課題を参加者全員で共有し議論した。

全体討論の内容

大学生2人の高校時代の探究についての報告からは、基調講演の中で松下教授が「高校の大学化」と紹介されたSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)の事例や1・2年生が合同で研究を行い企画から運営まですべて生徒主体で行う探究の事例の報告とその内容について質疑が行われた。その中で、教員の介入について、探究を行うグループ間での格差といった生徒のモヤモヤとともに大学で行う研究の基礎を学ぶことができたこと、大学の教員や他学年の教員との交流、校外の発表会に参加することで他校の生徒と生徒同士の交流から得られた成果、論文の使い方を学べたと

いった探究の成果と「課題設定の難しさ」「決められた期間に結論を出さないといけないこと」「わかりやすく伝えること」といった探究を通した様々な学習内容等が明らかになった。

また、大学生として高校生の探究について伴走を行っている学生からは、学生の視点から見えてくる生徒と教師の考えのズレ、教員からの提案は生徒のやりたいことになっているのか、教師の考えを押し付けることになっていないか、社会課題・地域・SDGsにつなげる必要があるのかといった課題設定の在り方や伴走者としての教員の課題、さらに、探究テーマとして、SDGsや社会課題が選ばれやすい背景について、社会課題が自分事としてつなげやすいといった指摘とともに、1年生のミニ探究テーマとしてアニメ、特撮、スポーツ、音楽、といったテーマをとことん調べ学習して、最終的に社会課題につながるといった探究でもいいのではないかとといった提案も紹介された。また、高校の探究について大学生、社会人としてかかわり続けることや大学院で学びながら関わることなどの思いも報告された。

高校教員からは探究学習を進めるにあたって2026年度から3年生にも1単位増やすといったカリキュラム上の対応とともに、生徒の探究学習が「調べ学習で終わってしまうことや活動を延長したいがお金や時間という課題」「生徒の興味関心を高めること」「教員のアプローチや連携の難しさ」「探究の分掌がないこと、担当2人が担任、進路指導部長と兼務している」「周りに見本となる事例が少ない、卒業生の見本がまだあまりない」といった課題も報告された。

到達点と今後の課題

前半のフォーラムにおける基調講演、パネルディスカッションの内容を受けた分科会としてその内容を深める適切な学びの場となった。

大学生による高校での探究事例報告や大学生が高校の探究に関わる事例、高校教員からの学校組織としての課題や単位数といったカリキュラム上の課題、生徒への伴走等、探究の成果や課題を報告者と参加者との質疑応答により共有することができた。

今後の課題として、高校の大学化、多様な生徒が在籍する高校での探究の実践など多様な高校が存在する中で、それぞれの高校ならではの探究活動の実践。高校の探究に大学生が関わることの意義。探究に関する管理職のリーダーシップ、探究を動かす高校の校務分掌、カリキュラムにおける課題、教員の伴走（教員の介入といった視点など）、探究に関わる経費等、実践を交流し高校・大学の教職員がネットワークを構築していく場としても、こうした分科会の設定意義を考えていく必要がある。



スライド 1

2025年度第23回高大連携教育フォーラム 特別分科会②

高校・大学がともに考える探究の「モヤモヤ」
～大学生が語る探究のモヤモヤ、探究を支える大学生の挑戦～

報告者
小村 柊翔（龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生）
大見 智美（京都工芸繊維大学 工学部 応用生物課程 2回生）
大橋 未都（京都工芸繊維大学 工学部 応用生物課程 2回生）
花登 淳平（京都府立須知高等学校 教諭）

コーディネーター
滋野 哲秀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員／
聖ヨゼフ学園 日星高等学校 校長／元 龍谷大学 文学部 教授）

スライド 2

学校法人 聖ヨゼフ学園 日星高等学校 校長
龍谷大学里山学術センター客員研究員
(公財)大学コンソーシアム京都高大連携コーディネーター
京都府スーパーサポートセンター専門家チーム委員
京都府立桃山高等学校SSH運営指導委員 京都府立北稜高等学校学校運営協議会委員
非常勤講師(京都工芸繊維大学・滋賀大学・平安女学院大学)
地学オリンピック日本委員会出題委員
元 龍谷大学社会学部・文学部 教授
元 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 教授
学校経営高度化コース主任
元 京都大学大学院教育学研究科 客員教授 元京都府立高等学校校長(桃山・朱雀)
@気象予報士

スライド 3

趣旨説明

探究学習は生徒が問いをつくり探究していく活動である。
かつての学校では教員が生徒に問うというスタイルが中心だったが、
生徒が問いをつくるという探究の過程は、生徒にとっても教員にとっ
ても「モヤモヤ」が生まれる。
本分科会では、大学生が自主的に高校の探究学習に関わっている事例
や探究学習を経験した大学生の「高校時代のモヤモヤ」、伴走する教員
のモヤモヤを共有し、探究の質を向上させるために
高校、大学ができることは何かを議論する。

スライド 4

探究的な学習
における児童
の学習の姿

探究のサイクルを回す

小学校学習指
導要領解説総
合的な学習の
時間編

中学校・高等
学校も同じ

2017年学習
指導要領解説

課題の設定
情報の収集
整理・分析
まとめ・表現

日常生活や社会
に目を向け、児
童・生徒が自ら課
題を設定する。

探究の過程を経由する。
① 課題の設定
② 情報の収集
③ 整理・分析
④ まとめ・表現

自らの考えや課題
が新たに更新され、
探究の過程が繰り返
される。

スライド 5

「総合的な探究の時間(高等学校)」
のカリキュラム例

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年	準備	探究のテーマ探し	調査	まとめ	発表	探究開始						
2年	探究を行う				中間発表					まとめ・発表		
3年	(論文作成、英語でプレゼン 他校との交流など)											

発表は ポスター、スライドなどいろいろな考えられる

スライド 6

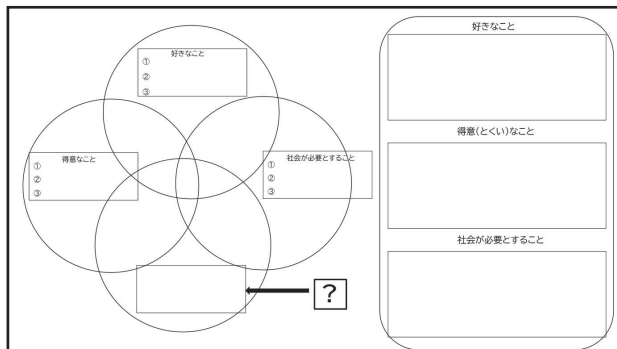
生きがいがある人は知っている
人生で大切な4つの要素
前野 隆司 から引用
日経BOOKプラス 2023.4.3

<https://bookplus.nikkei.com/atcl/column/041500053/031000120/>

図表1 ikigai ベン図

マーク・ウィン氏による図解をもとに作成。
<https://theviewinside.me/what-is-your-ikigai/>
<https://theviewinside.me/meme-seeding/>

スライド 7

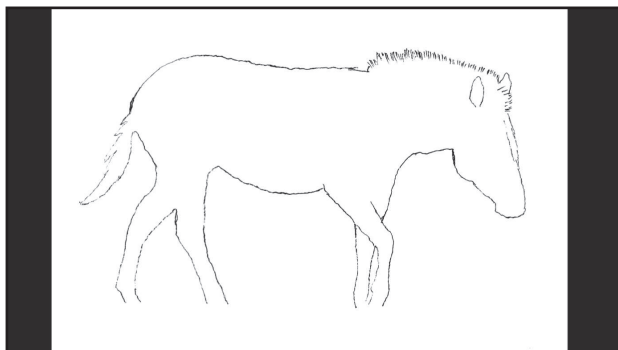


スライド 8

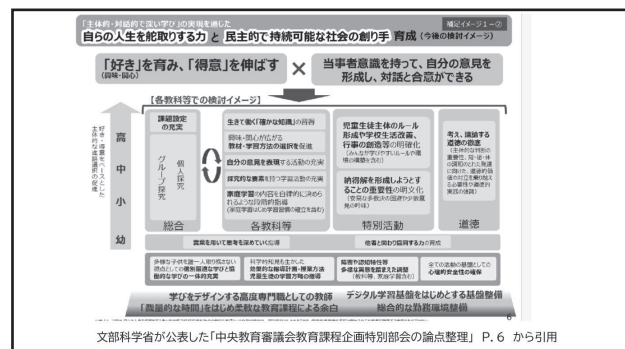
問いのデザイン」安齋勇樹・塩瀬隆之著(2020) 学芸出版社より

素朴思考	これはなんだ？ どうしてだろう？
天邪鬼思考	アイデアを潰すような一言 それはホンマか
道具思考	スマホで、望遠鏡で景色を見ると あの人が、これを見たらどう考えるか
構造化思考	問題を構造的にとらえる考え方 学校の成績が良くない原因 成績が上がればお小遣いも上がるか？ 問題を形づくっている要素や関係性は？
哲学的思考	物事の本質をとらえる営み 教育とは何か？ 恋愛とは何か？ 対話し、納得できる共通理解に到達すること

スライド 9



スライド 10



スライド 1

大学生伴走者の視点から考える現在の探究のモヤモヤ

龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生
学生団体 龍大クエスト 代表 小村柊翔

スライド 2

□目次

- 自己紹介
- 探究に関わり始めたきっかけ・活動内容紹介
- 探究伴走において感じているモヤモヤ その1
- 探究伴走において感じているモヤモヤ その2
- これからについて

スライド 3

□自己紹介



小村柊翔 Komura Shuto
龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生
学生団体 龍大クエスト代表
大阪府出身

大阪府泉大津市出身。高校はSSH・GLHに指定されている大阪府立岸和田高校に在籍し、課題研究に取り組む。現在は取り組んだ経験を活かし、龍谷大学内の有志での学生団体「龍大クエスト」で代表を務めながら日星高校の探究学習のサポート、和田中学校との交流会運営を行う。また個人として認定NPO法人カタリバの「学校横断型探究プロジェクト」内のオンライン合同授業のサポーターなども行っている。

スライド 4

探究に関わり始めたきっかけ・
活動内容紹介

スライド 5

□探究に関わり始めたきっかけ

【きっかけ】
大学の授業での滋野正道先生との出会い→(一社)ココラスタジオに参加

教育分野・こども
への興味関心

高校時代の
探究学習
(課題研究)
での経験

教員志望で
現場や生徒と
関わってみたい!
という思い

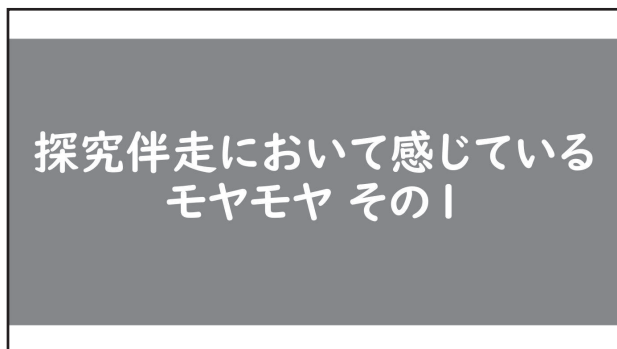
スライド 6

□活動内容紹介

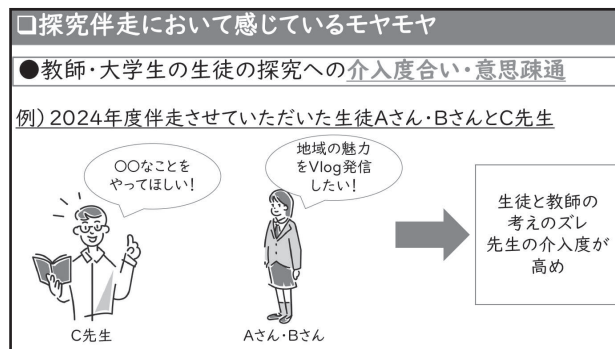
【龍大クエストとして】
・高校現場（現在は日星高校）探究の授業に
オンラインで参加し、伴走支援
※学期に1回程度現地訪問をし直接サポート

【個人として】
・認定NPO法人カタリバの「学校横断型探究プロジェクト」内のオンライン合同授業にサポーターとして参加
・その他中期的なオンライン伴走でのメンターを務めている。

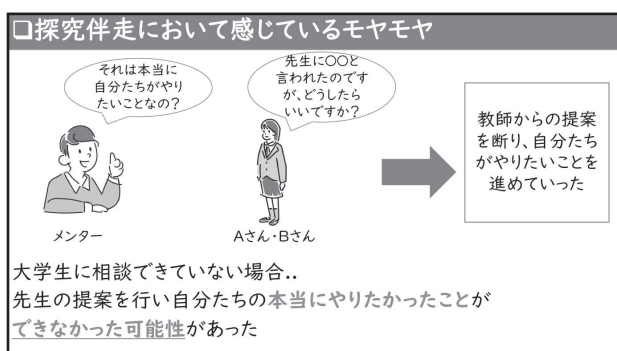
スライド 7



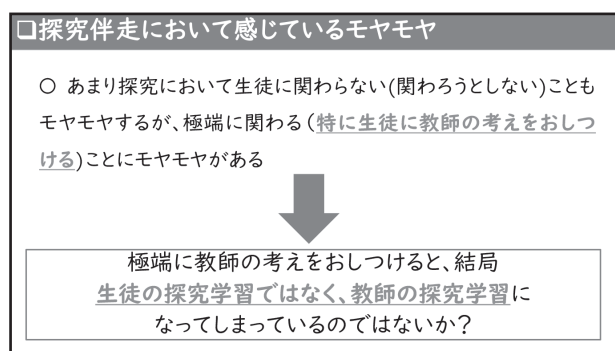
スライド 8



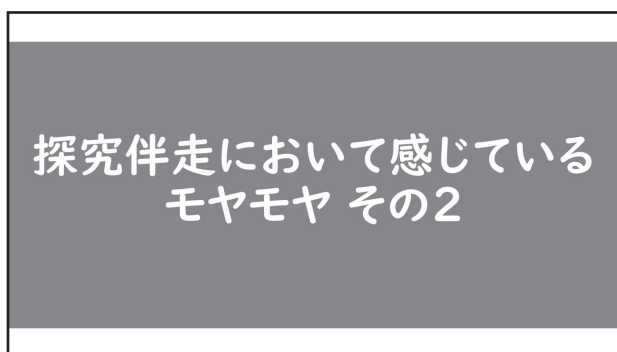
スライド 9



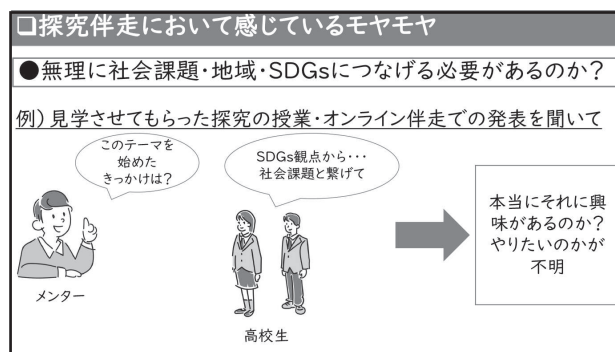
スライド 10



スライド 11



スライド 12



スライド 13

□探究伴走において感じているモヤモヤ

○社会課題・SDGsが探究テーマに選ばれやすい背景

- ・大学の推薦入試の面接等で使用することができる
- ・社会課題として挙がっていて自分事としてつなげやすい

★自分で興味があってそのテーマを選ぶことはもちろんOK

↓
ただ..

学校・教師側でそのテーマで探究をしろというのは、
生徒の主体性を阻害してしまっているのではないか？

スライド 14

□探究伴走において感じているモヤモヤ

●探究をこういったテーマ・方法で行ってもいいのではないか

- ・アニメや特撮といったテーマ
- ・スポーツや音楽といったテーマ
- ・とことんまで調べ学習をしてまとめる方法

⇒最終的にそのことを発信することができればいいのでは？

このような形で最初から地域や社会とつながるのではなく、
最後の成果という部分でのつながりでも問題ないのでは
ないか？

自分の興味・関心から始めることが1番大事なことでないか？

スライド 15

これからについて

スライド 16

□これからについて(自分としてできる・やりたいこと)

○現在の探究における問題点

- ・答えのないものであり教員側も経験をしていないために、
どのように生徒を伴走をすればいいのかわからない
- ・そもそも大学の授業で指導方法をあまり学べていない

↓

大学生、そして社会人として探究に関わり続ける！
大学院に行って探究について教科学習と絡めて研究をしたい！

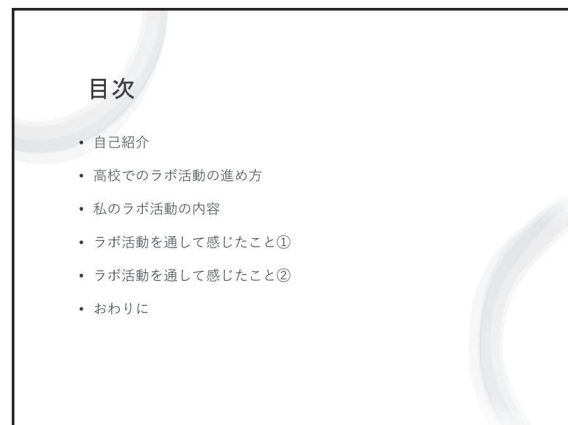
スライド 17

ご清聴ありがとうございました！

スライド 1



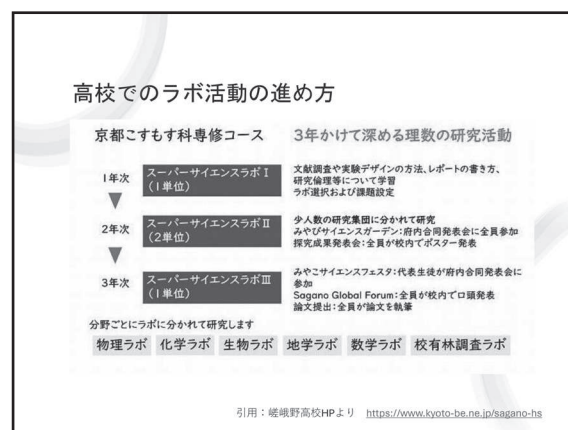
スライド 2



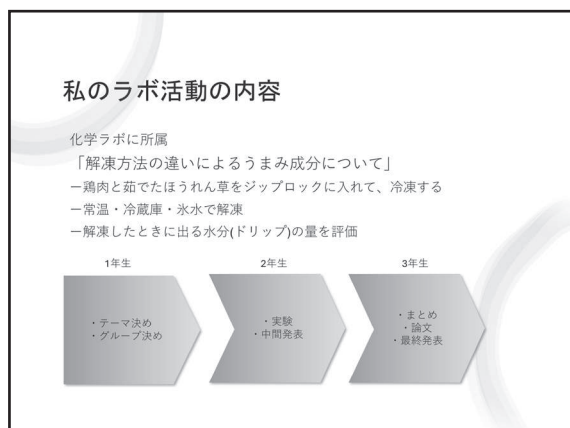
スライド 3



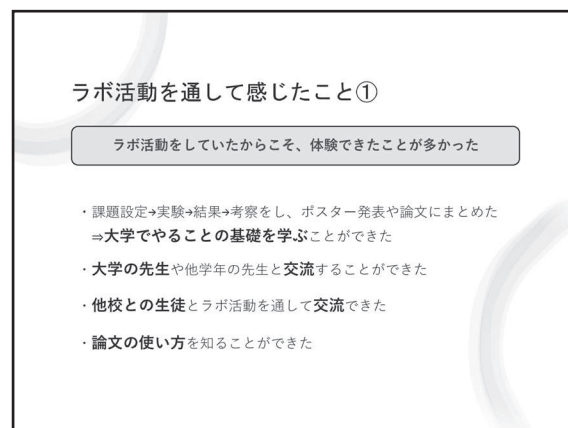
スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7

ラボ活動を通して感じたこと②

研究って大変だな

- ・ テーマ決め
- ・ 実験方法の検討
- ・ 結果から考えられる考察
- ・ ポスター発表や論文
⇒いかに分かりやすく伝えるか

スライド 8

おわりに

- ・ 高校3年間を通して、自分で道筋を考える力がついた
⇒大学の実験でも役に立っている
例)この操作をしているから、この結果が出てくるんだな
- ・ ラボ活動から得たことが、大学生活にも生かされている

研究室では免疫系のことを勉強したいな...

スライド 9

ご清聴
ありがとうございました

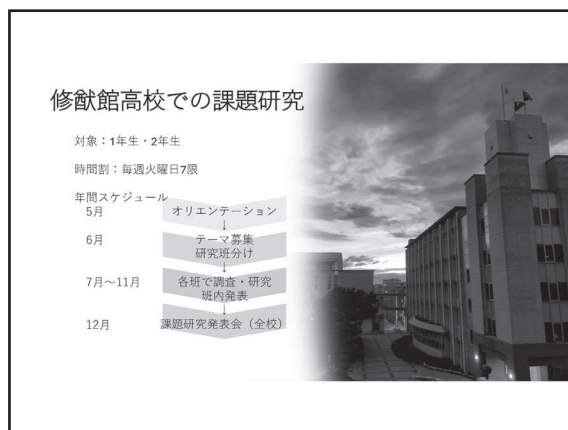
スライド 1



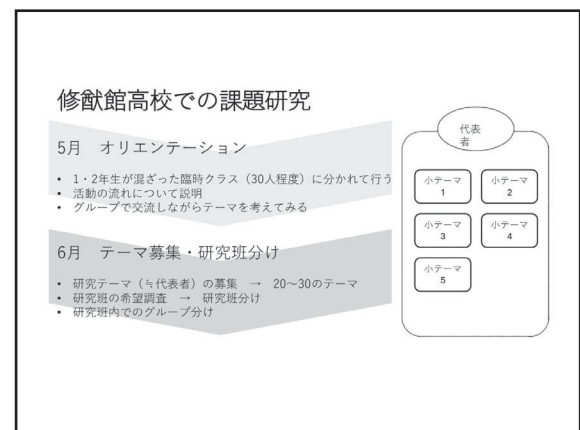
スライド 2



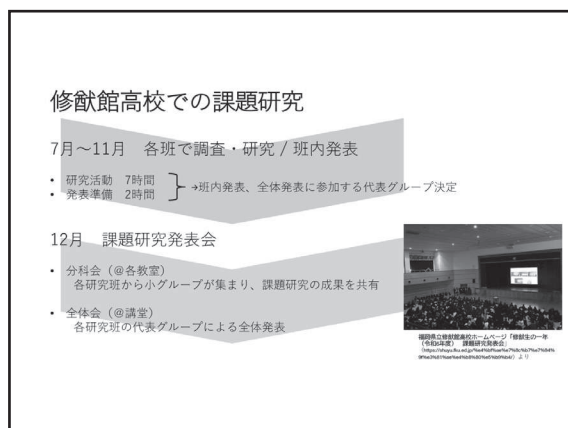
スライド 3



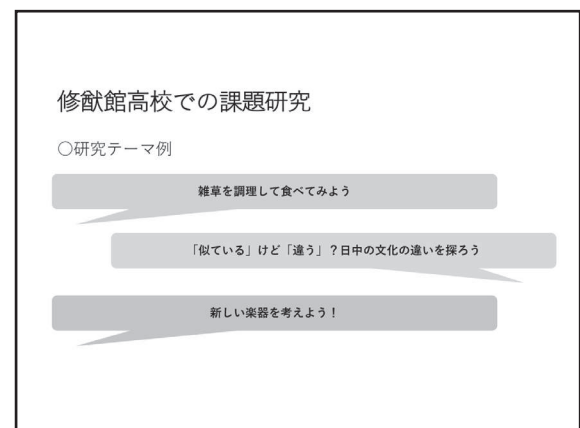
スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7

修猷館高校での課題研究

○良かったこと

- ・ 1・2年生合同で研究を行う
→1年生は2年生の助けを借りながら研究できる
- ・ 企画から運営まですべて生徒主体
→行事運営を経験できる

○モヤモヤしたこと

- ・ 教員の介入ほとんどなし
→不安が大きいまま進んでいく場面も
- ・ 班・グループごとの研究
→グループ格差、想定と異なるテーマで研究を行うことになる可能性

スライド 8

修猷館高校での課題研究

○大学生生活とのつながり

(私の場合)

文系・理系が入り混じった中での研究だったため
大学での学びとは全く違う分野の研究テーマ

↓

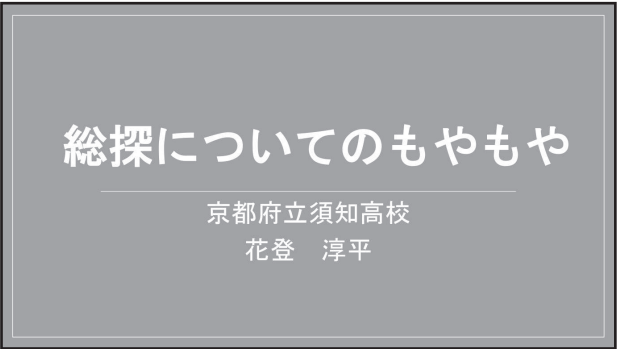
直接的なつながりはないが

- ・ テーマの設定
- ・ 研究方法の模索
- ・ 研究計画の調整
- ・ 研究班としての関係性づくり
の基礎を学んだ

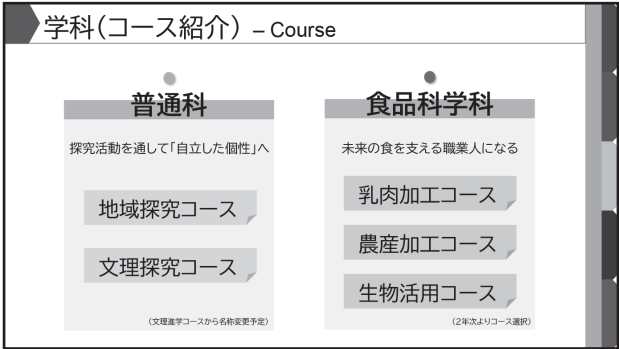
スライド 9

ご清聴ありがとうございました。

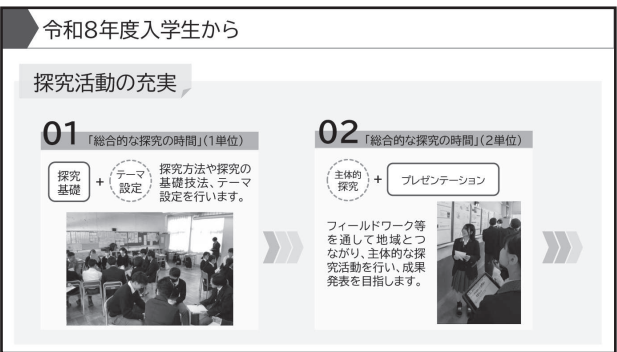
スライド 1



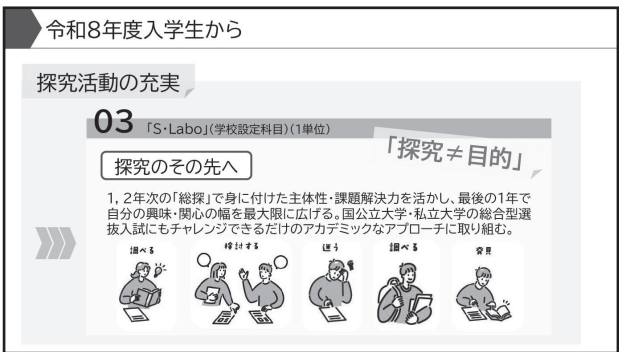
スライド 2



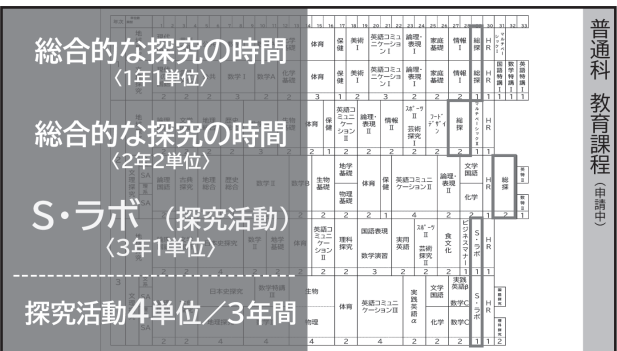
スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7

総探についてのもやもや

- ・調べ学習の延長になってしまう（でも行動には限度がある）
お金の補助なり時間の補助があれば・・・
- ・興味関心（知的好奇心）がある生徒が少ない
- ・教員側のアプローチや連携がむずかしい
- ・周りにいい見本がなくエンジンがかからない

スライド 8

1. 学習過程を探究の過程にすること

学習過程を探究の過程とするためには、以下のようになることが重要である。

- ①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

引用：文部科学省（2013）「今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開」

課題（テーマ）を生徒たちが自分で
見つけることが一番難しい！！

スライド 9

興味関心を引き出す
アプローチがわからない

探究の出発点でもあり、目標でもある
興味関心（知的好奇心）

行動に移す補助（お金など）
がないと動きづらい